

社会人

第73話

60年安保闘争に参加、現在は飲酒運転の撲滅に取り組み香村さん(東京・永田町)

50年前の6月15日。香村正雄(こうむら・まさお、74)は国会議事堂内にいた。日米安保条約改定に抗議し、南通用門から突入した約7000人の1人として。

数日前に、同じ東大生の榊美智子(当時22)の姿を見た記憶がある。後、NDI(日本民主主義者同盟)に安保反対運動の象徴的な存在となった彼女は、2000年に死去した島成郎の日記、混乱のなかで命を落とした。香村の頭の中は怒声と荒々しい靴音響き、「何が起きていたのか、わからなかった」。

ブントで活動

金沢市内の高校を出て、上京。大学では学生新聞会に所属した。小説「奇妙な仕事」で学内の五月祭賞を受賞した大江健三郎(75)へ取材した経験もある。2年後輩に

粉砕の情熱 飲酒運転に

わが戦い



た。日本を変えられると思えた途端、リアルな政治の前に蹉跌(さて)した。

救済組織を設立

その香村。08年3月、派手な深紅のボルボを駆って再び国会内に入った。今度は、運転者の呼気からアルコールを検知するシステム「インターロック」を国会議員に披露するためだ。

いま、飲酒運転事故の犠牲者や遺族らの救済組織「MADD (Mother's Against Drunk Drivers Against Drunk Driving) JAPAN」の理事として、すべての車への取り付け義務化を求め全国を回ると、香村は言う。

「あなた方がどう変われば、社会が受け入れてくれるのか。真剣に考えて」と訴え続ける。マッド・ジャパンは、

代表で千葉県鎌ヶ谷市の飯田和代(いいた・かずよ、66)の悲痛な体験を基に生まれた。

97年、当時20歳で飲酒運転のドライバーの犠牲者になった飯田の次女。水泳のインストラクターと「普通のお母さん」が夢だった。飯田は深い悲嘆にたたき落とされ、そこから抜けだそうともがくなか、遺族の支援や未成年者への教育を進める米国のMADDの存在を知った。

「日本にもこんな団体があれば、私のような存在が救われる」。相談を持ちかけた親せきから「新しく組織をつくるのならこの男しかいない」と折り紙付きで紹介されたのが、香村だった。

刑務所に赴き、飲酒運転の罪で服役する動法人(NPO法人)立ち上げの実務。公認会計士の仕事傍ら、飯田との二人三脚で奮闘、03年に日本支部が産声を上げた。

「感想や自らの体験談を社会人取材班」まで、ファクス(03・6225・2771)、手紙、電子メール(shakata@okyo.nikkei.co.jp)でお寄せください。

敬称略 (毛糠秀樹)